

国語教育相談室

小学校

no.

72

光村図書

特集

話す・聞く・話し合う

わたしと
こころ

心の中に島が見えるか
石川直樹

教師力
講座

はじめの一步を大切に！

書写

自己評価を
とり入れよう



赤木かん子の
読書力アップ！
学校図書館の
作り方 (CDつき)

赤木かん子 著

本の内容

- ① たった一人でもできること
- ② 分類と配置
- ③ 部屋全体を使いやすい図書館に
- ④ お悩み解決!! エリア別の工夫
- ⑤ Q & A コーナー

定価 2520 円 (本体 2400 円)
B5 判・並製・128p ISBN978-4-89528-475-2

好評発売中

光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.137 2011(平成23)年1月14日発行 定価126円(税込)

発行人＝常田 寛 発行所＝光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111

http://www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp

印刷所＝村田印刷工業株式会社 デザイン＝mint grafix

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
http://www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

心の中に 島が見えるか

今年の大半、ぼくはポリネシアの島々を渡り歩いてきた。現在、太平洋の島嶼部に暮らしているのは、四千年ほど前に東南アジアのあたりから、東の海へと漕ぎ出した人々の子孫である。彼らは生粋の航海者であり、海洋民だった。

海図もコンパスもなかった時代、島影の见えない水平線へ向かって旅に出た最初の人々の勇氣に、ぼくは心を揺さぶられずにはいられない。その先に島があるかどうかともわからなかったのに、今いる島を飛び出して、まだ見ぬフロンティアを目指して旅立った人々が確かにいた。その勇氣はいったいどこからくるのだろうか？

もちろん渡海理由はいくつもある。台風による被害で島を出て行かざるを得なかった島民もいただろうし、漂流や遭難によって見知らぬ島に偶然たどり着いた漁師もいただろう。が、それと同時に島の岸边に立って好奇心から沖へ漕ぎ出した人々もいたのだ。そうした冒険者たちの軌跡と奇跡が現在のポリネシアを生み

出したといえる。

この頃の航海に不可欠だったのが、近代計器を用いない伝統航海術だった。これは、多様な自然情報を生きた知恵に置き換えていく身体技法の一つであり、遠い宇宙を自らの身体に取り込む洗練された技でもある。しかし、このような航海術は、西洋人が島にやってきて以降、急激に失われていく。

ポリネシアで完全に消滅したと思われた航海術を今も受け継ぎ、実践していたのが、ミクロネシアに住むマウ・ピアイルグという名の老航海者だった。ぼくは十年前に彼と出会い、航海術の基本を教わっている。そのとき、広大な海を旅する際に最も大切なこととして彼が教えてくれたのが、見えない島をビジョンとして脳裏に描くこと、すなわち「心の中に島が見えるか」ということだった。

鋼のような大海に身一つで漕ぎ出すためには、常に目的地の島を心に描いておかなければならない。そうすれば、アクシデントに見舞われても、嵐に遭遇しても、船を目的地に導くことができる、と。

これは自分の人生にもあてはまる。迷ったとき、ぼくはいつもマウのことを思い出す。その彼も、今夏、老衰のために亡くなった。その一報を受けてはじめて気づいたのだ。ぼくにとっての「島」とは、まだ二十代になったばかりの頃に出会ったマウ・ピアイルグその人だったのだ、と。



1977年東京都生まれ。写真家。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、Pole to Pole プロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破。01年当時の世界最年少世界七大陸最高峰登頂達成。04年熱気球で太平洋横断に挑戦し、そのルポルタージュ『最後の冒険家』（集英社）で関高健ノンフィクション賞を受賞。写真集『NEW DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。最新写真集に『CORONA』（青土社）がある。

CONTENTS

わたしとことば 心の中に島が見えるか 石川直樹

特集 02 話す・聞く・話し合う

提言 いまこそ話し言葉による交流を 藤森裕治

「話すこと・聞くこと」Q&A 邑上裕子

実践提案1 「ごっこ遊び」を通して学ぶ 新しい指導を考える会

実践提案2 「笑点」をしよう！ 立石泰之

実践提案3 言えなかった「ありがとう」を伝えよう
新しい指導を考える会

教師力講座 11 はじめの一步を大切に！ 安田恭子
授業びらきは 学びの心びらき 吉永幸司

書写の時間を
考えよう 7 16 自己評価をとり入れよう 新しい指導を考える会

古典って楽しい！ 20 第三回 春の短歌・俳句 青山由紀
作・画／吉永直子

24 平成23年度 指導書のご案内

話す・聞く・話し合う

今回の学習指導要領では、

「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の指導事項が、それぞれ系統的に示されました。

本特集では、平成二十三年度版指導書『「話すこと・聞くこと」の授業をつくる』の監修を務められた先生方に、話す・聞く・話し合う力の大切さや、その力をどう育てていくかをうかがいました。また、授業のヒントとなる実践を三例紹介しました。

提言

いまこそ話し言葉による交流を

信州大学 教授 藤森裕治

新しい小学校学習指導要領（国語）には、「話し合う」という表現が二十五か所ある。平成十年度版では十か所だったので、二・五倍の増加である。このうち、「話し合う」「述べ合う」など、話し言葉による活動であることが明記されている記述は十一か所ある。

十一か所の「話し合う」が記述されている項目は、「話すこと・聞くこと」だけではない。例えば第三学年・第四学年の「読むこと」には、「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。（２）ア」とある。同じく「書くこと」には、「書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。（１）カ」とある。

「書くこと」「読むこと」（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）には、延べ六か所に「発表し合う」という指導事項が新設されている。「発表」の仕方には劇化や書いたものを読み合う活動もあって、話し言葉に限定することはできない。しかし、発表し合うという活動が口頭発表なし

に成立するとは、常識的に考えにくいだろう。このように、新しい学習指導要領ではすべての内容領域と指導事項にわたって話し言葉による交流が示されている。「話し合う」「述べ合う」という活動は、国語科学習の基盤を構成する、重要な言語活動なのである。

いま筆者は「話し言葉による交流」と書いたが、話し言葉による言語活動は、例外なく交流という要素を伴う。声の届く場に自分と相手がいって、情報を伝達し共有する営みが話し言葉による言語活動である。このとき、伝えようとする音声情報は話し手から聞き手へという流れをなすが、当の情報があるようなメッセージとして伝わるかは、場面の文脈と話し手・聞き手の協働性によって決まる。

場面の文脈とは、どこで、どんな目的で、どういう関係の人々がどんな手段で話し言葉をやりとりするのかという状況がもつ意味である。例えば蒸し暑い教室で先生が児童に語りかける場面と、真夏の公園で出

会った主婦同士が会話する場面とでは、「暑いですね」という言葉を発する意図や意味が異なる。

話し手・聞き手の協働性とは、話し言葉による情報の意味内容は、話し手と聞き手のやりとりによって決定するという性質のことである。先の例で、教師が「暑いですね」と言うのを聞いた児童の一人が窓を開けたとしよう。このとき、教師の言葉は「蒸し暑いから窓を開けて涼しくしましょう」というメッセージを形成したことになる。

話し言葉による交流を数多く経験することによって育まれる学習者像を一口で言うとして、「思慮深い言語主体」である。思慮深い言語主体とは、相手や場、目的に応じた言葉を用いて、自分の考えを筋道を立てて述べたり、互いの考えの共通点や相違点を考えたり、決まりを守って計画的に話し合いを進めたりすることのできる主体を指す。こうした言語主体を育てるために、いまこそ話し言葉による交流を活性化させたい。

ふじもり・ゆうじ

長野県生まれ。東京都立高等学校教師を経て、信州大学教育学部教授、教育学博士。専門は国語科教育学（授業研究、日本民俗学、NHKラジオ高校講座講師。著書に『死と豊穣の民俗文化』（吉川弘文館）、『国語科授業研究の深層―予測不可能事象と授業シナリオ』（東洋館出版社）など。





「話すこと・聞くこと」Q&A

「話すこと・聞くこと」は、指導や評価が難しいとよく言われます。現場の先生方から多く寄せられる悩みや疑問に、
邑上裕子先生（新宿区立落合第四小学校）が答えします。

Q 聞くことが苦手な子が多くて困っています。

A 「耳を鍛える」指導をし、「聞く姿勢」を教えましょう。

聞く力をつけさせるためには、「耳を鍛える」指導と、「聞く姿勢」を教えることが大切です。

「耳を鍛える」ために、低学年では耳をすまして「聞きひたる」体験をたくさんさせるとよいでしょう。読み聞かせや言葉遊びなど、楽しみながらたくさん聞かせる場面を設定したいですね。中学年では、「聞



き取ってメモをする」という活動をさせます。新版の教科書には「聞き取りメモの工夫」（四年下）という教材がありますが、先生が文章を読んで、それを聞き取ってメモをするという練習をするといよいでしょう。高学年になったら、校長先生のお話など、実際の場面为主体的に聞く練習をさせます。校長先生のお話が終わった後にメモをさせて、自分はどう感じたか、自己内対話をし、書かせる指導をするといよいと思います。

それから、「聞く姿勢」を教えることも大事です。聞き手は、話し手に「聞いていますよ」というサインを送らなければいけません。低学年では、「話している人のお顔を見ながら、うなずきながら聞きましよう」と指導します。中学年では、わからないところがあつたら質問するところまでもつていきたいので、「質問があるときには、話が区切れたときにしましょう」などのルールを指導します。さらに高学年は、考えて聞く段階ですから、自分の新しい考えに結びつけられるように、質問や感想を考えながら聞くように指導します。

Q 「話すこと・聞くこと」の評価は、どのようにしたらよいでしょう。

A 話し合いをさせるときは、グループごとに、子どもたちのやりとりを丁寧に見て評価しましょう。

「話すこと」は音声が出ているので、わりと評価しやすいのですが、「聞くこと」は、子どもの内面的な動きなので評価がとても難しいですね。ですから、聞き取りメモや、聞いた後にわかったことをワークシートに書かせるなど、書くという表現におとして評価するといよいでしょう。また、話し合いの場面では、聞いた後に反応ができていいる、行動ができていいる、などの態度面で評価することもできます。

話し合いをさせるとき、わたしは、「今日はこのグループ、明日はこのグループ」と決めて、分割して見ていくようにしていました。話し合いには、「相手」と「場」

Q 一方的に話してばかりで、なかなか「話し合い」になりません。

A 話し合いは「受けて返す」が基本であることを、きちんと指導しましょう。

があります。子どもたちが「場の雰囲気をつくみとり、相手の話を聞いて、反応しているか」ということは、実際に教師がグループの中に入らないとわかりません。

よく、子どもたちに話し合いをさせて「どう、まとまったかな？」と、話し合った結果だけを聞いてしまいがちなのですが、大事なのは、話し合う過程です。時間はかかりますが、グループごとに、話し合いのやりとりを見て、評価に加えていきましょう。

話し合いは、「まとめていく」というよりも「つなげていく」つもりで進めましょう。

例えば、「わたしもそうなんだけど…」「へえ、そうなんだ。ぼくはね…」「違う意見なんだけど…」「なるほどね」など、子どもたちが日常的に使う言葉で、相手の話とつないでいくような言葉を事前に示してあげるといよいと思います。また、話し合いの進め方をイメージさせるために、わたしは黒板に吹き出しを貼っていく、という指導をよくしました。話し合いは、「受けて返す」を繰り返してつなげていくものだから、

ということを理解させるのです。

話し合いには大きく分けて、「拡散的な話し合い」と「収束的な話し合い」があります。文学作品の読解のときは「拡散的な話し合い」になりますが、何かを決めなければならぬときは「収束的な話し合い」になります。話し合いの前に、「今日は、みんなの意見を広げていこう」、あるいは「今日は、意見を広げていいけど、まとめなければならぬから、話し合いのテーマに戻つたりするよ」と、話し合いの種類を、きちんと子どもたちに示していくことも大切です。

なるべく具体的なやりとりを例に示して学ばせ、子どもたちの話し合いを活性化させたいものです。



模造紙で作った吹き出しを用意しておき、パッパッと貼って、「受けて返す」話し合いの流れを示す。

むらかみゆうこ
邑上裕子

東京都生まれ。小学校教諭、立川市教育委員会指導主事、東京都教職員研修センター統括指導主事等を経て、現在、新宿区立落合第四小学校校長。東京都小学校国語教育研究会会長。文化審議会国語分科会委員。共著に「小学校国語学習指導実践辞典」（東洋館出版）など。





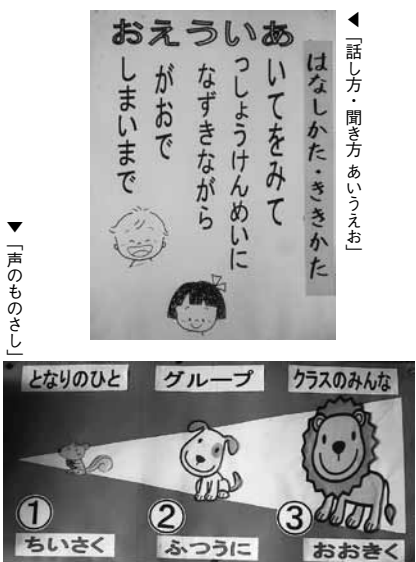
1「ぐいぐい遊び」を通して学ぶ

使用教材：「ものの名まえ」「おみせやさんぐっこをしよう」（二年下）

1 はじめに

一年生の子どもたちは、「ぐいぐい遊び」が大好きである。本教材も興味関心を示すとてもよい教材である。大喜びで主体的に活動に取り組むだろう。そこで、留意しておかなければならないことは、学習のめあてをしつかりとたせ、何のための学習活動なのかということを常に教師が意識しておくことである。

本校では、学習の基本的なきまりと「話



し方・聞き方 あいうえお「声のもののさし」

「発表のしかた」等、年間を通して指導している。ここでは、このような学習の基本を改めて意識させたいので、楽しく生き生きとした単元になるようにしたい。

「ものの名まえ」で、上位語と下位語を知ること、売る物の概念をとらえる。それを生かして、「おみせやさんぐっこをしよう」では、お店やさんの準備段階と本番での「聞く・話す」活動がある。実の場で「話すこと・聞くこと」の学習を促すことのできる教材である。ロールプレイ（役割演技）を取り入れることで表現力を豊かにするなど、工夫次第で尋ねたり応答したりするという言語活動を活発に行うことができる。

2 指導計画（全十一時間）

ここでの学習は、「ものの名まえ」と「おみせやさんぐっこをしよう」の二教材を組み合わせて行う。

第一次

ものの名前について知ろう（三時間）

教材文を読み、上位語と下位語について知る。

第二次

「おみせやさんぐっこ」の準備をしよう（六時間）

自分たちがやりたい店や、おみせやさんぐっこに必要なものについて話し合い、準備をする。

第三次

「おみせやさんぐっこ」をしよう（二時間）

・売る人と買う人の上手な話し方・聞き方について話し合って練習する。
・おみせやさんぐっこをする。

3 指導の実際

第三次 第十一時

めあてをもって「おみせやさんぐっこ」をする。

4 おわりに

学習活動が熟してくると「りんごください」「はい、どうぞ。百円です」のような会話だけで終わってしまいがちであるが、「りんごを一つください」

「いらっしやい。一つですね。百円です」

「はい。百円」

「あまいりんごですよ。ありがとうございます」

のような一往復半以上の会話を心がけたい（これらのことは、練習段階でしっかりと経験させておく）。よいやりとりをしている場面を見かけたら、十分にほめて、全体に広めるとよい。

子どもたちの学習意欲を大切に、生き生きとした学習活動にしたい。



楽しく「おみせやさんぐっこ」に取り組む子どもたち。

■おみせやさんの場を設定する

【活動場所 設定の工夫】

店は、部屋の周りにつくり、真ん中を広く空けて買い物しやすくする（下図参照）。

【その他】

売る人と買う人を区別するために、店の人はバンダナ等をつけると、なりきることができる。

■めあての確認をする（十分）

前時で使用したワークシート（学習指導書一下p.117に掲載されているもの）を振り返る。

【めあての例】

はなしかた（おきやく）

・ていねいなことは、はなす。
・なにをいくつかうか、はつきりとはなす。……など。

ききかた（みせのひと）

・わからないことは、ていねいなことばで、たずねかえしてきく。
・うなずいたり、たしかめたりしてきく。……など。

前時に模造紙にまとめたものを使って、めあての確認をする。よい。活動後、ワークシートの後半に「おみせやさんぐっこ」の振り返りを書くことを予告しておく。

■活動を振り返る（十分）

・めあてについて振り返り、ワークシートに記入する。
・感想を発表する。



2 「笑点」をしよう！

使用教材：「言葉遊びの世界」(四年下)

1 はじめに

「話すこと・聞くこと」の授業づくりのポイントは、児童の課題意識の喚起であると考えられる。この場合の児童の課題意識とは、「聞き手の立場に立った話す内容や話し方をどのようにすればいいのか」という考えである。このように児童にとって必然性のある課題にまで高めることができれば、あとは教師が授業のなかでその方法を示すだけで、児童は自らの話し方を見直していくようになる。

本稿では、「言葉遊びの世界」(四年下)を取り扱う。本教材は、言葉の特質を知って、言葉遊びの文化に親しませることをねらいとしている。言葉遊びにはさまざまな種類があるが、その性質によって文字にするよりも音声にした方が楽しいものがある。そこで、本教材では「話すこと・聞くこと」を中心とした活動を行い、児童に聞き手の立場に立つ必然性をもたせる場の設定を行っていききたい。

2 指導計画 (全十時間)

本実践ではテレビ番組の「笑点」の大喜利を参考に、児童が考えた言葉遊びを紹介する場の設定を行う。大喜利とは、出題者の問題に対し、それぞれの回答者がおもしろいことを言えば、座布団がもらえるという番組内のコーナーである。

大喜利には得点を増やしていくというゲーム性がある。また相手を楽しませなければ得点できないという点から、いかに相手を楽しませるか、その話す内容や話し方を検討する必要性が出てくる。

そこで、すべての児童がそれぞれの言葉遊びについて自分で考え、回答者となって学級全員の前で発表する活動の場を設定した。

- 第一次 テレビ番組「笑点」を視聴し、活動のイメージをもつ。(一時間)
- 第二次 教科書を読み、言葉遊びの作り方について練習する。(二時間)
- 第三次 各班で問題についての回答を検討

- 話し、練習する。(三時間)
- 第四次 学級で大喜利を行う。(二時間)
- 第五次 全員の考えた言葉遊びを冊子にまとめる。(二時間)

3 指導の実際

第三次 第四〜六時
各班で問題についての回答を検討し、練習する。

本学級の児童は四十名であり、四人で一グループの十グループを構成した。大喜利の問題を四問とし、各グループで一人ずつが担当として前に出ることとした。問題については、教科書に紹介されている言葉遊びから全員で話し合い、「しゃれ」「回文」あるいはお作文「なぞかけ」の四つとなった。まず、教師から各問題について次のような例を挙げたプリントを全員に配付した。

- ① しゃれ一つにつき、二文書きます。実際には、一文目を言った後、先生が「何だい。」と聞きます。そうしたら、二文目のしゃれを言います。
例「エジプトの人が砂ばくで言ったんだって。」「何だい。」「らくたに乗ると楽だ。」
- ② 回文一つにつき、二文書きます。実際には、一文目を言った後、先生が「何だい。」と聞きます。そうしたら、二文目の回文を言います。
例「大変だよ。」「何だい。」「たけやぶやけた。」
- ③ 自分や友だち、先生や家族の名字を使って、その人を紹介しましょう。相手が聞いて、傷ついたり、悲しくなったりする内容はダメですよ。
例「立石先生を紹介します」

- 立石先生の「た」、「楽しんで」。
- 立石先生の「い」、「いつもやさしく」。
- 立石先生の「し」、「しかりつけます」。
- ④ なぞかけ一つにつき、三文書きます。実際には、「二文目を言った後、先生が、「その心は。」と聞きます。そうしたら、三文目の答えを言います。
例「整いました。おなががいっぱいの人とかけて、宇宙と解きます。」「その心は。」「いっしょにもぐつぎがありません。」

児童は、それぞれのプリントに自分が考えた回答を書き込んでいった。図書室やインターネットで調べたり、家族に聞いたりする様子が見られた。その後、各自が書いた

たプリントを持ち寄り、グループで話し合ってから各問題で発表したいものに順位をつけさせていった。そして、各問題を担当する児童をグループで話し合ってから決めさせ、発表の練習の時間を設けた。教師からは、第一次で視聴したときのことを思い出させ、



上：ふだんはおとなしい児童も元気に手を挙げる。
下：発表に聞き入る児童たち。

「声の調子」や「問の取り方」などを意識するように助言をした。その後、第四次として、学級で大喜利を行った。教師が司会を行い、座布団の代わりには各自の帽子を使って、おもしろい回答には頭に帽子を重ねてかぶせていった。

4 おわりに

次は、学習後の児童の感想である。「わたしは、笑点といっても、ときどき見るだけであまり関心はなかったけれど、今回の授業でとてもおもしろいものだと思う

いました。どこがおもしろかったのかというと、…(中略)…みんなの発表のしかたがいろいろあるところ、みんなの意見がいろいろあるところなどです。そして、わたしは人前で発表するのが苦手でした。ですが、この授業のおかげで人前で発表するのが得意になりました。また人の意見をよく聞けて、意見を言えて、先生が教えてくれた声の調子のことを生かしていきたいです。…(略)」

今後も児童が「話す・聞く」必然性を感じられるような課題意識を喚起する場の設定について実践を重ねていきたい。



使用教材：「今、わたしは、ぼくは」（六年下）

1 はじめに

目前に迫る卒業。
卒業とは「ひとり立ち」すること。
そのためにどれだけ保護者の方にお世話になったか。
時に口やかましい小言、おせっかい。
その裏側にある願いを思い描けるか。
それを思い描けることが、成長した証。
それに対し感謝できることが成長した証。
言えなかった「ありがとう」を伝えよう。

まもなく小学校を巣立っていく六年の三学期。子どもたちには、これまで育ててくれた保護者に感謝の気持ちを伝えさせ、それを保護者にも知ってもらいたい。そこで、小学校最後の参観日で、保護者に感謝の思いを伝える一分間スピーチを設定した。

しかし、思春期にさしかかる彼らには、恥ずかしさもある。そこで、単元の初めに担任として冒頭の言葉を伝え、また、堂々

と述べるからこそ、成長の証という意識をもたせる。

2 指導計画（全六時間）

第一時

三月にある最後の参観日に「一分間スピーチ大会（言えなかった『ありがとう』を伝えよう）」を行うことを決める。ここで、相手意識、目的意識をもたせる。

第二時

自分が伝えてみたいことをマッピングして、発想を広げる。

第三時

マッピングしたものから、ひとつ題材を選び、内容をふくらませる。

第四時

ペアになり、構成したスピーチを発表し合い、相互評価をしながら、加除修正する。項目をつなぐ接続語、文末を考える。

第五時

ペアになり、視線、声量、速度、間、表

情の観点で、相互評価しながら、練習し、次時の発表に備える。

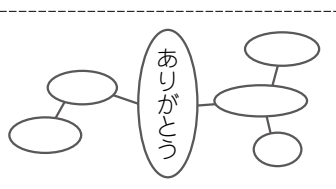
第六時

参観日に保護者の方に向けてスピーチ大会を行い、感想をもらう。

3 指導の実際

■第二時の様子から

子どもたちは、入学してから今まで、保護者に感謝する場面が数多くあっただろう。それをまず思い出させ、下のように思いついたことをマッピングさせる。



できるだけ子どもたちがたくさん書けるように、次のような観点を示しながら指導する。

- ①自分が印象に残っているものから、まず書いていく。
- ②学年を決めておき、学年別に書いていく。

③困っていたとき、悲しかったときなど自分の感情に合わせて書いていく。

④出来事に合わせて、「いつ、どこで、誰と、なぜ、どのように、そのときの会話」など、具体的なことも書き込んでいく。また、書いている児童数名に途中で発表させたり、ペアで情報交換させたりする。自由にマップを書くことで発想が活性化する子もいれば、視点を与えられることで発想が活性化する子もいる。また、具体的なシーンを示唆することで書ける子もいる。子どもたちの思考のスタイルに対応して進める。

■第三時の様子から

前時でマップに書き広げたことを整理する。さらに、そのときの保護者の気持ちはどうだったか想像し、そのときの自分の気持ちはどうだったか、それを比較して今どう思うのか、この三つを加えさせる。

保護者の行為の裏側にある思いを浮かべ、そのときの自分の気持ちと比較する。そして、感謝につなげられることは、保護者に依存している気持ちから一歩成長し、自身の思考の広がりを表すものである。このこ

▼ワークシート

時	
場所	
人物	
どんなこと	
どのように	
どうなった	
なぜ	
会話	
自分の感情	
想像する保護者の感情と理由	
比べて思うこと	

■第四時の様子から

「ありがとう」の気持ちが一番伝わる順序を改めて考え、項目の横に話す順をメモする。表の一番上と一番下、また、項目間をつなぐ言葉や文末表現を考え、そして、この順序でこの言い方で保護者には伝わるかどうかを相互評価していく。

次時の音声面での相互評価も必要だが、メモ等を参照しつつ行うスピーチでは、この段階で自然な流れができていることが肝心である。

4 おわりに

最後の参観日では、子どもたち一人ひとりが、しっかりと保護者に向けてスピーチを行うことができた。相手・目的意識が明確にあり、話す内容にも構成にも自信をもっていたことがその理由だと思う。

「話すこと・聞くこと」領域の授業が充実するか否かは、子どもがその活動に対して意味を感じ、どれだけ意欲を示すにかかっていると思う。

意欲のある、目的を明確にした言語活動を仕組み、その中で自分を見つめ、心も耕していきたいと思う。

はじめの一步を大切に！

元新宿区立西戸山小学校教諭
やすだきょうこ
安田恭子

気持ちよいスタートが一年を決める

新しい学年の始まる四月は、やらなくてはならないことが山のようにあるの。学年だよりの名前を考えたり、時間割を作ったり。教室移動の私物整理もあるし……。もちろん会議が目白押し。何も考えないうちに学習がスタートしちゃう。どうしたらいいの？

「新年度のスタートは大切だよ」って先輩からも言われているんだ。だから、名簿を何回も見ても子どもたちの名前を覚えたり、机の配置を工夫したり。まず担任の自己紹介を作って……。一生懸命考えて、子どもたちの前に立ったのに、去年はなんだか空回りしてたなあ。



A

未知の世界に胸はずませて入学式を迎える一年生はもろろんのこと、新しい友達や先生と、新しい一年のスタートを切る二年生以上の子どもたちにとっても、新しい教室での始まりはわくわくしていることでしょう。その大切な学級ひらきで、どんな「国語ひらき」をするか、しっかり考えておきたいものです。机の上の教科書、ノート、筆箱の置き方、本を読むときの教科書の持ち方、授業中の言葉づかい、ノートの使い方等、何事もはじめが肝心です。学年ごとによく考えて、よいスタートを切りましょう。



一年生は

何よりも「学校に来るのが楽しい」「国語の学習が待ち遠しい」というスタートにしたいものです。

▼名前の掲示

大きな紙に子どもたち全員の名前を丁寧に書き、教室の壁面等に貼りだしておきます。そして、文字学習の都度、学んだ文字を○で囲んでいきます。たったこれだけのことで、文字学習がぐんと楽しくなります。

一学期の終わりには、すべて○で囲まれた名前のカードを、一人ひとりの子どもたちに切り離して渡してあげましょう。

あ	お	き	た	ろ	う	
い	の	う	え	じ	ん	
う	み	の	ひ	ろ	し	
お	お	ど	り	あ	き	ら

二・三年生なら

たとえクラス替え等がなかったとしても、一学年進級したのだという喜びを意識させましょう。

▼交流学習

二年生に進級した子は一年生の教室へ、三年生ならば二年生の教室に行つて、本を読んであげたり、紙芝居をしてあげたりします。そのことで、「もう一年生とは違うんだ」「こんなに本読みが上手になったんだ」「等の自覚が生まれ、進級の喜びとともに、さらなる向上心が培われることでしょう。



四・五年生では

「いよいよ上学年だ、高学年だ」という自覚と責任を大切にしましょう。もちろん進級を祝福してあげることを忘れてはなりません。

▼コース別学習

国語の教科書のとびらに載っている詩をさまざまな方法で学ばせ、紹介あいます。それぞれの子どもの得意を生かし、自己肯定感をもちたせてスタートしましょう。

例えば：

A コース 音読

どの言葉にどんな心をこめて読むかを考えて披露します。

B コース 暗唱

自分が心に描いたイメージを声にのせて暗唱を聞かせます。

C コース 創作

四年生ならば「あ、今……」の言葉を生かして一年のスタートの思いを詩の形で発表します。他にも絵と説明で紹介したりするコースなどが考えられます。

六年生ならば

いよいよ六年間の小学校生活の節目となる一年間のスタート。国語学習の集大成として、どんな自分で卒業し、中学校へ旅立つのかイメージをしっかりとつことが望まれます。

▼自己診断カード作成

新版の教科書の冒頭には「学習の見通しをもとう」という表があります。それを見て、今までの自分の力を自分なりに見取り、努力すべきことを記入し、一年間の学びに向かう姿勢をつくりましょう。

国語自己診断カード (氏名)			
教材名	今までの力	努力すること	ふり返り
せんねんまんねん		イメージしながら読むこと	(自己評価します)
続けてみよう	読書・詩集は作成済み		
カレーライス	人物関係	お父さん、ぼくそれぞれの立場を考える	
(学びながら書き足していってよい)			

新しい学年になると、子どもも教師も気持ちが入る。新しい教科書やノートが、学習意欲を盛り上げる。授業ひらきの段階では、経験年数や指導力はあまり関係がなく、誰が授業をしても上手にできることが多い。しかし、そのような上手な授業を、五月以降にも続けるのはなかなか難しい。続ける秘訣は、授業ひらきを「学びの心ひらき」として位置づけることである。そのためには、次の三つのことに留意をすることが大事である。

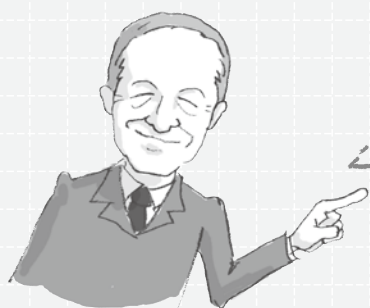
一つ目は、「勉強したい」という気持ちにさせること。そのためには、子どものよいところを見つけ、認めることである。文字が上手に書けている、挙手の指先が伸びている、発言が整っている。探せば次々見つかる。良さを見つける。また、子どもの話をしっかり聞くことで、信頼関係を築くことができる。

二つ目は、「比べないこと」である。子どもとつしを比べる、今まで

学びの心を開く 授業ひらきにする

授業ひらきは 学びの心ひらき

よし なが こう し
京都女子大学教授 吉永幸司



陣取り合戦で子どもに負けないような強さを

授業ひらきは教師と子どもの陣取り合戦である。少し、ひがみっぽい言い方をすれば、「今度の先生はどのような先生か」と品定めをしてい

担任した子と比べる、前年度のクラスと比べる、というようなことはしない方がよい。なぜなら、比べることの背景には、優秀をつけるという気持ちがある。劣った方に回った子に、それを乗り越えて頑張ろうという気持ちは、授業ひらきの段階にはない。最初は、どの子も自分がいい子だと思われたいし、これからの勉強に夢をもちたいのである。

三つ目は、「冗長な話をしないこと」である。教師がはり切ると、妙に指示や説明が多くなる。しかし、聞くだけで疲れるのが子どもである。勉強のしかたや注意事項を最低限にする気持ちで話す。一年間頑張ろうという気持ちを育てるのは冗長な話ではない。学びの心を開く始まりは、一つずつ丁寧に指導することだから。

る子もいる。だから、いろいろな手を使って子どもは試してくる。教科書を忘れる、冗談めいた行動をするなど。また、前の学年に叱られたり、注意を受けたりした子、賢いと思われる子への対応をじっと見る。しっかり指導をしてほしいという気持ちをそつという形で表す。それは、子どもが自分の陣地を広げようとする知恵である。だから、教師も子どもに負けないよう陣取りに勝つ覚悟が必要である。教師が、陣取りで子どもに勝つには、「とてもかわわない」を思わせることである。上手な音読、美しい文字、丁寧な話し方、勉強嫌いを好きにさせるなど、教師として当たり前のことを子どもに見せるのである。これが子どもには「すごい」になる。この「すごい」が本物になるように日常の研修をする。

つまり、陣取りで子どもに勝つには、「今度の先生は授業が上手、しっかり教えてくれる」と思わせることである。それが、学びの心を開く授業ひらきの決め手である。

“国語ひらき” 4つの視点

1 約束づくり

名前を呼ばれたら、必ず明るい声で「はい」と返事をする、学習時の言葉づかいは敬体で行う等、基本の約束を徹底します。利き手によっては、教科書とノートの位置を左右変えた方が、ノートをきちんと体の前で書くことができます。

2 話すこと・聞くこと

学校生活でいちばん大切なことは、人の話を聞いて理解することです。話し手を見て、相手が何を伝えたいかを考え、最後まで聞くことは、1年生の初めから指導しなくてはなりません。また、わからないことを尋ねる習慣もつけましょう。

3 書くこと

「面倒くさい」の一言で、ノート等に文字を書かなかったり、乱暴な字でノートを書きながったりする傾向が見られます。先生自身が丁寧に正しく、より美しい日本語を板書したり、ノートに書き入れたりしましょう。

4 読むこと

「教科書の○ページをあけて…」という先生の言葉で学習が始まってしまっは、子どもたちの期待はしぼんでしまいます。挿絵が提示されたり、登場人物のペープサートが動いたり等、1時間ごとのスタートも大いに工夫したいものです。



「国語ひらき」は「学級ひらき」の土台です。なぜなら、国語の学びこそが、子どもたちの生活の核であるといっても過言ではないからです。

もし、自分のもっている引き出しでは、よい「国語ひらき」ができそうでないとしたら、ぜひ、先輩の引き出しも借りて、豊かで楽しく、子どもたちにとって、国語が、学校生活が、大好きになるような「国語ひらき」を工夫してください。

自分の得意な分野を生かして取り組むのもいいですね。

自己評価をとり入れよう

新しい指導を考える会

書写の自己評価を、授業の最後に少しだけ行って終わりにしていませんか。書写の本を読んでも少ししか載っていないので、「自己評価はそんなに重要ではないのでは」……と思われる方もいるかもしれません。自己評価をきちんと行くと、子どもたちが主体的に、考えながら学習に取り組むようになります。ぜひ積極的にとり入れてみましょう。

1 自己評価の問題点

書道での臨書のひととき。
一枚書きあげては、手本と見比べて、「あそこが違う」「筆使いが悪い」「字形が気に食わない」……繰り返し返していくうちに一時間、二時間と時間が過ぎていきます。自分に謙虚になれる至福の時間です。よく考えてみると、臨書にせよ、創作にせよ、一枚書きあげるたびに、自己

- 4 自分の能力はこの問題を解くのに十分であるか。
 - 5 どこに短所があるか。
 - 6 いま目標のどの位置にいるか。
 - 7 結果を整理してあるか。
 - 8 どのように変化したか。
- といった諸点について、自分自身の反省と評価を行なうことになる。

五十年ほど前の資料ですが、まったく古びていません。でも、これだと、「あれもこれも」状態に陥って、自尊心は失われていきます。

一方、『書写指導の方法』（光村図書出版）によると、

「自己批評」とは、自分が書いたものを基準に照らして評価し、適切な部分で改めること。批評に代えて、「評価」「吟味」「診断」などの語を用いることもある。

これはどうでしょう。「基準に照らして評価」することによって、「あれもこれも」状態には陥らずに済みます。観点を一つか二つにとどめることが自己評価のポイントです。

評価をして次の書字に取りかかる……これは、Plan→Do→Check→Actionの「PDCAサイクル」そのものではないでしょうか。しかし、趣味の書道の世界とは違い、書写の授業は四十五分間しかありません。その中で練習できる時間は、最大限三十分、普通に考えれば二十分程度です。
書写の「練習」は、教材文字を何回も書くストイックな活動になりがちです。書道の練習のように常に自省を求めるよ

3 自己評価の具体例

さて、自己評価は実際にどのようなようにしたらよいでしょう。書写の授業で、自己評価は、「まとめ」の最後に行うのが一般的です。学習全体を振り返って、左のような書写カード（※1）を利用したり、教科書や書写ノートの振り返り欄を利用したりということがよく行われています。

1…書写カード

書写カード		年 組	番 名前	月 日	曜 日
1	2				
「もんがまえ」はたてに ほぼ二等分に書く。	「もんがまえ」は右側を やや大きく書く。				
3	「もんがまえ」の中は 小さく書く。				
4	「もんがまえ」と中の部 分は中心が同じになる				
5	自分の題				

うな活動をしていては、粘り強さが低下してきた今の子どもたちにとって「書写嫌い」を生み出すことにつながりかねません。毛筆を始めたばかりの三年生は書写が大好きなのに、学年が上がるにつれて書写嫌が増えていく……。技能面がほとんど身につかないまま進級していくことだけではなく、書写のもつこのネガティブな一面が書写嫌いを生む要因になってはいないでしょうか。
やみくもに自己評価を繰り返すならば、「折れの筆使いがだめだ」「三画目が少し長くなった」などなど、あれもこれも広げてしまい、自尊心が失われることも少なくありません。

2 自己評価とは

書写における「自己評価」はどういう意味で使っているのでしょうか。『現代の書教育』（上條信山著／木耳社）によると、

- 1 自分の向かうべき目標は何か。
- 2 自分はましがいいなく目標に進んでいるか。
- 3 自分の計画は正しいか。

このように、本格的な自己評価は、まとめの段階で行いますが、さらに左図のように、「試し書き」をした後に自己評価を行い、それをもとに自分の課題を決めたり、練習するたびに手本と見比べて自己評価をして次の練習に取り組んだりすることも可能です。

第1次 「知る」ために書く	①ねらいを知る ②課題を見つける ③基準を知る	ここでも自己評価
第2次 「解決する」ために書く	①試し書きをする ②自分の課題を決める ③練習する ④まとめ書きをする ⑤評価をする	ここでも自己評価 自己評価
第3次 「応用する」ために書く	①ほかの文字を調べる ②硬筆の学習を生かして硬筆で書く ③評価する	自己評価

2..書写カード

かまえ
書写カード

◎文字の組み立て(かまえ)と穂先の動きを確かめよう

仲間

④ひろげよう

「かまへ」のある漢字をえんひで書きましよう。

○「仲間」を使って文を書きましよう。

⑤ふり返りましょう。

◎○△
Cがまえのある文字は、内側をかまえの中におさまるように書くことが分かった。

◎○△
「仲間」などを書くことができた。

◎○△
ことができた。

©
O
Δ

まとめ書きへ

試し書き

仲

もて
た

中
中
間

との
し

間
間
間

と
し

間
間
間

教科書または書写カードの
「ここをなおそうコーナー」
に直したい箇所を記入

いよいよ新しい学習指導要領が全面実施されます。「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、さまざまな問題に積極的に対応し、解決する力」を培うのにも、「自己評価」はとても重要な役割を果たします。

自己評価することは、次なる自分の具体的な課題を明確に設定することにも役立ちます。また、課題解決の見通しや意欲を養うのにも有効です。教師の適切な支援や指導のもとで自己評価を繰り返すことは、子どもたちの「生きる力」を高めることにもつながります。

しかし、子どもたちにとって自分自身を客観的に見て評価することは、かなり難しいことなのではないでしょうか。上位の子どもは自分に厳しく、下位の子どもは甘くなることが多いようです。それを防ぐためには先生の評価と相互評価を併用するのが有効です。

他の子がどのように書こうとしているのか、自分とは違った良さは何かを感じ取り、お互いが教え合い、相互評価や共同評価などを行いながら学習を進めます。

5 最後

「文字を美しく丁寧に書く」ということは、日本の大切な美意識であり、文化です。子どもたちの書字力を格段に高める「個人評価」に取り組んでみませんか。

そして先生は、子どもたちのまとめ書きをひたすら褒めまくりましょう。自身を謙虚に見つめ続けた子どもたちです。できるだけ多くの子どもを褒めまくって書写に対する意欲を高めてほしいと思います。

●参考資料

『現代の書教育』（上條信山著／木耳社）

『書写指導の方法』
(光村図書出版)

『小学校書写五年學習指導書』

（光村図書出版）

『能動的自己評価（ASE）の累積による課題解決の自己判断力の変容—小学校5年生書写の実践から—』（松本勝信・小林祐貴／大阪教育大学紀要 2008）

ただ黙々と手本に従った練習を繰り返すだけではなく、学習集団として影響し合い、高め合う姿も見られるようになります。そこで、メッセージカード(※3)を用意し、まとめ書きを見ながら、グループごとにメッセージを書くのもいいでしょう。

もっと簡単な方法もあります。写真1のように、まとめ書きの作品を机の上に置いて、場所を移動しながら見合う。い

3..メッセージカード

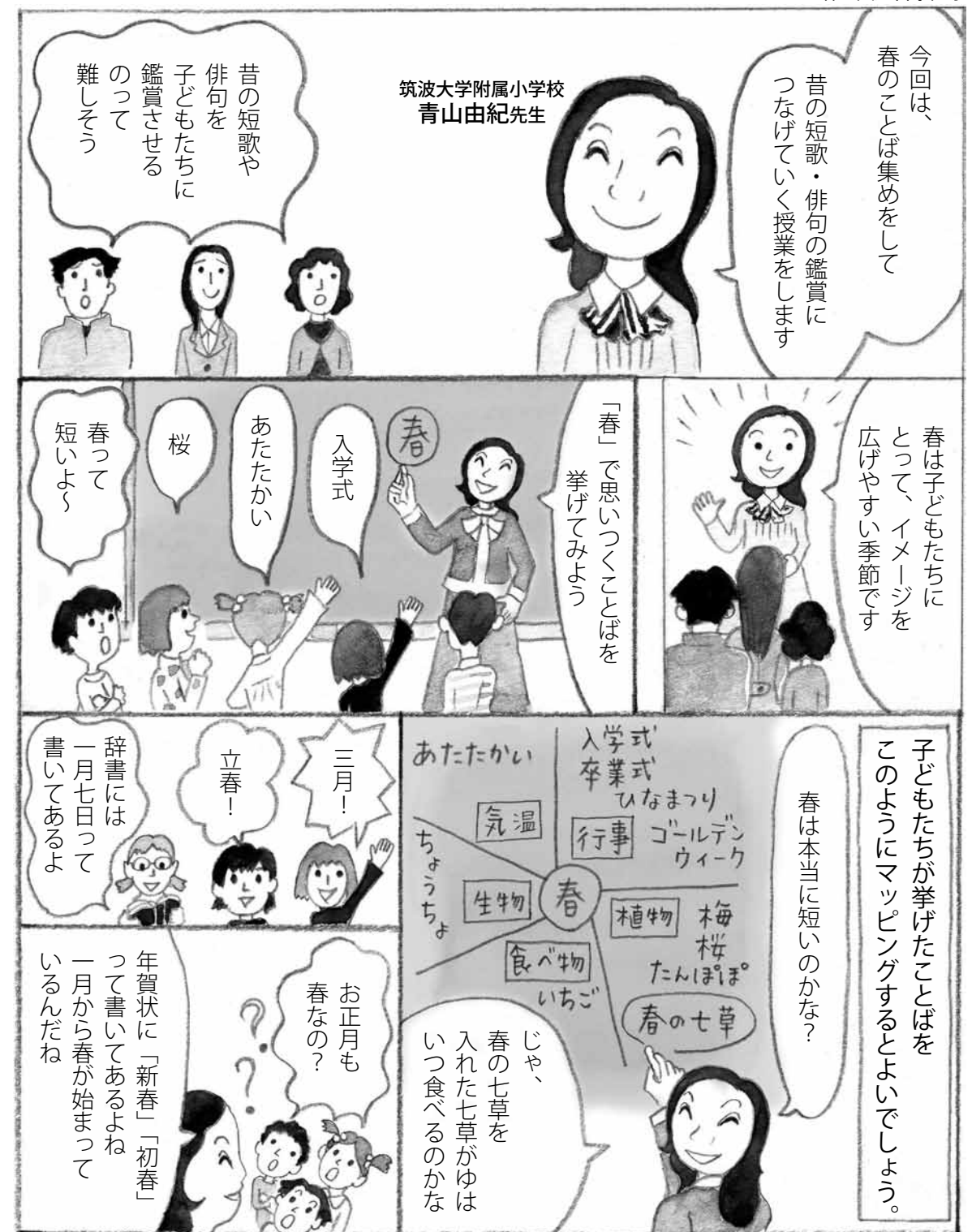
メッセージカード 月 日 曜日

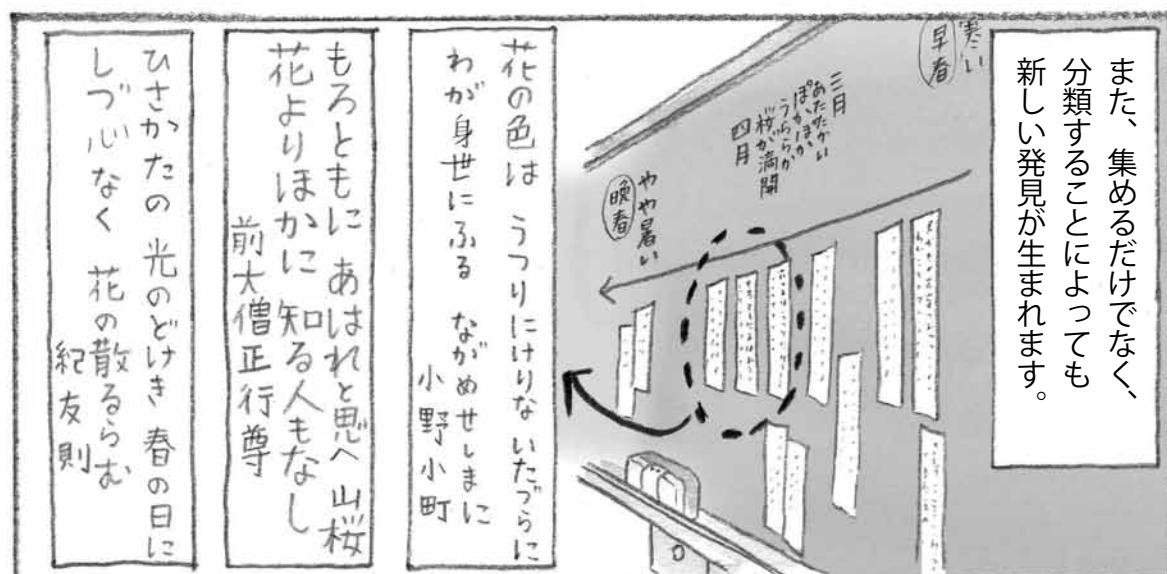
名前

友達から



写真
1





教科書を、より効果的に活用できるようさまざまな指導書をご用意いたしました。先生方の指導を、サポートします。

指導書のご案内



「読むこと」の授業をつくる 文学編

1～6年 全1冊
本体3,000円＋税

梶田萬理子先生と青山由紀先生の教材研究のしかたを紹介。「絵本」「長編」「映画」など多様な様式も取り上げ、新しい「読むこと」の指導を提案しています。

「読むこと」の授業をつくる 説明文編

1～6年 全1冊
本体3,000円＋税

梶田萬理子先生と青山由紀先生の教材研究のしかたを紹介。「広告」「レシピ」「時刻表」など多様な様式も取り上げ、新しい「読むこと」の指導を提案しています。

「読むこと」の授業をつくる 文種に応じた説明文の指導

監修：安河内義己
1～6年 全1冊
本体3,000円＋税

文章の特色をとらえた教材研究と、特色を生かした言語活動、同一様式の複数の文章を読む授業を提案しています。

指導事例集 23版対応実践記録

監修：中西一弘・菅原 稔
1～6年 各1冊
本体各5,000円＋税

23年度版教科書に対応した 生きた授業実践記録集

授業記録をもとに編集。授業者の情熱と、児童の個性的な反応が伝わります。

発問・指示・助言・板書・児童の反応が丁寧に記録されているので、そのまま実践に活用することができます。

「話すこと・聞くこと」の 授業をつくる

監修：藤森裕治・邑上裕子
1～6年 全1冊
本体3,900円＋税

教科書の「話すこと・聞くこと」教材を「分析」し、学級の実態に合わせて「再構成」する授業のつくり方を提案。継続的な指導を提案したり、他領域との関連を解説したりしています。

「書くこと」の授業をつくる

監修：松山美重子・佐渡島紗織
1～6年 全1冊
本体3,900円＋税

教科書の「書くこと」教材を「分析」し、学級の実態に合わせて「再構成」する授業のつくり方を提案。さまざまな言語活動や取り立て指導についても解説しています。

学習指導書

1～6年 各学年2分冊
CD付
本体各学年12,500円＋税

指導計画例や指導展開例など 指導に役立つ資料が満載

各単元の設定趣旨、言語活動とのかかわり、指導計画例、計画例に沿った指導展開例などを中心に構成しています。指導展開例は、基礎・基本をおさえ、国語の力が着実に身につく授業のための板書例・発問例を丁寧に示しました。

CD 「話すこと・聞くこと」教材のすべてに対応した音声資料を収録。「読み聞かせ」教材や、「声に出して楽しむ」古典教材の音読例も収録しています。

ワークシート集

1～6年 各1冊
CD-ROM付
本体各3,200円＋税

毎日の授業ですぐ使え、 児童の主体的な活動と評価に役立つ

学習指導書で示した指導展開例に即し、日々の授業のなかで活用できるワークシートです。児童が主体的に、かつ楽しく学習できるように工夫しています。

CD 収録データは、児童・学級の実態に応じて、加工が可能です。Word形式でも収録しています。小社ホームページにアレンジのしかたを掲載する予定です。

学習指導書 総説編

1～6年 全1冊
DVD-ROM付
本体5,800円＋税

教科書をより効果的に活用し、 6学年を見通した指導を実現させる

教科書の編集方針や構造を解説し、その全体像や特色から活用のしかたがわかるようになっています。また、新しい学習指導要領と授業の改善の方向や、評価の考え方をわかりやすく解説しています。

DVD 全教材の漢字にふりがなを付したデータ、4学年までの「読むこと」教材本文を分かち書きにしたデータを収録。特別支援教育や日本語を十分に習得できていない外国から来た児童の教育に役立ちます。

学習指導書 別冊（朱書編）

1～4年 上巻・下巻
本体各巻3,000円＋税
5・6年 各1冊
本体各5,500円＋税

日々の授業に役立つ 教科書と一体型の指導書

教科書の紙面をそのまま活用し、視覚的にわかりやすく編集。指導の方法や、指導のポイントを具体的に示しています。

せいかつ 上 学習指導書

CD・CD-ROM 付
本体16,000円＋税

教科理念や現状と課題など、生活科そのものの解説や、教科書を有効的な使い方など、指導に役立つ資料が満載です。

CD 教科書に掲載された曲など全9曲の楽譜と、カラオケを収録。また、生活科の活動やねらいに応じたカードブックも収録されており、児童の実態に応じて編集も可能。

せいかつ 下 学習指導書

本体8,000円＋税

生活

学習指導書

CD-ROM 付
3・4年上 本体4,500円＋税
3・4年下 本体5,000円＋税
5年 本体7,000円＋税
6年 本体7,500円＋税

児童の「問い」と「気づき」を生かして、問題解決の学習を展開する具体的な方法など、「生きる力」を育てる社会科授業に役立つ資料が満載です。

CD 年間指導計画例、ワークシート、テスト問題、画像・動画などの資料を収録。

学習指導書 別冊（朱書編）

3・4年上 本体4,000円＋税
3・4年下 本体4,500円＋税
5年 本体6,000円＋税
6年 本体6,500円＋税

学習指導書

1～6年 各1冊
CD-ROM 付
1・2年 本体各3,500円＋税
3～6年 本体各4,500円＋税

本冊▶ 「総説編」「指導実践編」「指導研究編」という三部構成で、教科書をより効果的に活用できるよう、わかりやすく解説しています。

別冊資料▶ 授業で活用できる「硬筆ワークシート」や、毛筆大字教材についてのワークシート「毛筆用原寸大資料」などを掲載。

CD 教科書準拠の動画資料や、「硬筆ワークシート」、かご字・骨書き・穂先の通る道などさまざまなパターンを用意した「毛筆ワークシート」を収録しています。

書写指導の方法

1～6年 全1冊
本体2,800円＋税

要素ごとに汎用性のある指導法やポイントを紹介。書写の普遍的・系統的な指導が可能な構成になっています。各要素に23年度版教科書の該当箇所も示し、効果的な指導が図れます。

書写のアイデア集

1～6年 全1冊
本体3,500円＋税

「もっと書写指導を楽しく」を合言葉に、児童がわくわくするような実践を集めたアイデア集です。

書写

漢字指導の方法 確かな定着と活用のために

監修：阿辻哲次・棚橋尚子
1～6年 全1冊
本体3,800円＋税

「理論編」では、漢字指導の基本的な考え方を解説。「実践編」では、日常的・継続的な漢字指導のアイデアなどを提案しています。

語彙に着目した授業をつくる 指導事例編

監修：甲斐睦朗
1～6年 全1冊
本体3,800円＋税

「教材編」では、語彙に着目して教材分析をし、具体的な指導事例を紹介。「生活・学習編」では、さまざまな機会をとらえた語彙指導のアイデアを解説しています。

語彙に着目した授業をつくる 語彙表編

監修：甲斐睦朗・松川利広
CD-ROM 付
1～6年 全1冊
本体4,500円＋税

教科書に提出されているすべての言葉（自立語）を五十音順に整理し、初出箇所、各学年での頻度、重要度、分類番号（国立国語研究所に基づく）を一覧にしました。また、「国語科専門用語」「学習基本語彙」も収録しています。

CD 「本表」と「延べ語表」（初出箇所だけでなくすべての提出箇所がわかる表）を収録。品詞ごと、教材ごとなど、用途に応じて検索をかけることができます。

言語指導の方法 確かな定着と活用のために

監修：森山卓郎・森篤嗣
1～6年 全1冊
本体3,800円＋税

「理論編」では、「国語の特質に関する事項」を項目別に解説。「指導編」では、言語要素ごとに、その定着を図るためのワークシートとその活用のしかたなどを提案しています。

メディアの活用力を育てる 実践事例集

監修：中川一史
1～6年 全1冊
本体3,000円＋税

メディアの活用力を「見る」「見せる・つくる」の二つに分け、各学年段階で身につけたい能力を示しました。実践事例も多数紹介しています。

音読・朗読の指導 伝統的な言語文化と詩・物語

監修：西村佐二・田中洋一
1～6年 全1冊
本体4,000円＋税

範読・音読の基礎の解説、音読・朗読の授業展開、活動のアイデアを掲載。伝統的な言語文化の研究および授業に役立つ知識も紹介しています。古典学習のための、発展・補充教材も掲載しています。

国語

光
村
の

これ1冊で漢字はかんぺき!

漢字ステップドリル

2011年
春発売!!



「漢字力」は、
自分自身でつくるもの。

- ◆光村図書「国語」完全準拠
- ◆1年:上下刊 ◆2～6年:各学期刊・上下刊
- ◆B5拡大判 32～80ページ ◆4色刷り
- ◆シールつき ◆別冊たしかめテストつき

◆1年(上下刊) ◆2～6年(学期刊) **340円(税込)**
◆2～6年(上下刊) **510円(税込)**

光村のテスト

国語到達度評価シート

光村図書「国語」完全準拠

必要な枚数をコピーして使えるテスト!

■テストシート集

- ①「読む」テストシート(標準問題) ②「読む」テストシート(記述重視問題) ③言語事項テストシート
④「話す・聞く」テストシート ⑤「書く」テストシート ⑥学期末・学年末テストシート

■別冊解答書

テストシート集の赤刷り別冊解答書

■CD-ROM

- ①テストシート集・別冊解答書のPDF ②得点集計表(単元別・観点別)
③「話す・聞く」テスト用音声

1～6年 各1セット
(テストシート集、別冊解答書、CD-ROM)
価格各 **8,400円** (本体価格8,000円+税5%)

光村教育図書株式会社

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-27-4
TEL.03-3779-0581 FAX.03-3779-0266
<http://www.mitsumura-kyouiku.co.jp/>

研究会のご案内

第56回 全国国語教育研究大会

開催日 平成23年2月4日(金)・2月5日(土)

会場 京都市立二の丸北小学校・京都市総合教育センター

テーマ 「言語活動を通して、豊かに学ぶ子」

内容 (1日目) 基調提案・オリエンテーション

講話:京都市教育委員会指導主事 橋本真千子氏

提案授業(1～6年各1学級)

研究協議(1～6学年部会)

(2日目) 講演Ⅰ:文部科学省教科調査官 水戸部 修治氏

講演Ⅱ:詩人 アーサー・ビナード氏

会費 3,500円

連絡先 京都市立二の丸北小学校内 全国国語教育研究大会本部

〒612-8141 京都府京都市伏見区向島二ノ丸町300

TEL:075-622-4684 FAX:075-622-4623

教科書編集部便り

教科書や授業で扱うのは、パブリック・スピーキング、つまり改まった場での「話す・聞く」「話し合う」が主です。特に中学年以上では、グループや学級での活動が多くなります。裁判員制度のニュースに接するにつけても、そのような「話すこと・聞くこと」の力をしっかりつけることは、万人に求められているものだと思います。

いっぽうで、どのように改まろうか、人数が増えようが、「言葉の力」という意味で考えるなら、一対一のやりとり、しかも対面でのやりとりが基本になると考えられます。日常的な対面のやりとりで、ともすると誤解が生じたり、人間関係がぎくしゃくしたりすることは、大人の世界でも同じです。言葉には「力」があり、それは正邪両方に働くのです。

そのような考えから、来年度から使われる新教科書では「アサーション(※)」という概念を導入しました。「コミュニケーションコラム」とよんでいる教材で試みているのがそれです。「うれしいことば」(2

年)、「きちんとつたえるために」(3年)、「話す言葉は同じでも」(4年)、「話し合うために大切な言葉」(5年)、「伝えにくいことを伝える」(6年)。ふと、立ち止まって、人間関係を豊かにする言葉の力や働きについて、児童とともに考えていただけたらと願っています。

※アサーション:相手の気持ちに配慮しながら、自分の意見や気持ちを表現すること。

【常用漢字について】

このたび改定された常用漢字について、その学校教育上での取扱いが決められました(「常用漢字改定に伴う学校教育上の対応に関する専門家会議」)。小学校に関連するものは以下のとおりです。

- ①学校では24年度から指導を行う。
- ②追加された漢字は全て中学校配当とする。
- ③追加音訓の扱いについては、今年度内にとりまとめられる。→小学校での扱いになるものは、改めてお知らせします。